No.115
公民館だより
平成14年7月
宮津市字由良
由良の里センター内
由良地区公民館

公民館活動

由良地区公民館長　飯澤登志朗

平成十四年度由良地区公民館活動について次頁以降に新役員及び事業計画を記載していますが、ご理解をお願いし皆様のご意見等お寄せいただきたいと思います。

宮津市公民館連絡協議会では今年度活動の重点として四項目を掲げています。

一、生涯学習の振興
二、人権教育の推進
三、家庭・地域の教育力の向上
四、文化・スポーツの振興

由良地区公民館では、従来の行事を継続しながら示された四項目について幅広い分野を視野に入れて活動を進めてまいります。

少子高齢化社会の対応については、以前から色々な意見が出されていますが由良地区に於ても児童数が減少し、将来も増加する傾向は残念ながら見られません。

このことは避けて通れない現実であり、正面から向き合ってみる必要があります。

学校週五日制のもとでの地域、家庭、学校との連携の強化について色々な意見が伝わってきます。

例えば、「子どもは忙しい、土曜日が休みになっても塾通いが増えるだけ」「先生は休みが増えて楽になる」等々。

去る六月二日に宮津市地区対抗駅伝競走が開催されましたが、多くの方々のご協力によりチームが編成され長期間に亙る練習を積み重ねてきましたが、このことは地域・家庭・学校の連携の大きな成果だと思います。

小・中学校のご協力や地域では自治連合会長を中心とした支援体制が敷かれ、さらに家庭では選手の体調や心細やかな配慮があって出場が可能になりました。

成績云々よりチームが纏まって活躍できたことを評価し、駅伝以外でもさらに連携を深めていきたいと思います。

次に高齢化について考えてください。

由良地区の高齢化は宮津市内でも高い比率で推移しています。

六十五才以上を高齢者としていますが、該当する方々は健在で年寄り扱いに不満のことと思いますが、税法上で老年者控除を受けている以上甘受せざるを得ません。

アメリカの元大統領カーター氏が著書のなかで「自分が老人だと考えるようになった時に老人になる」「若々しい七十才のほうが年寄りくさい四十才よりましだ」と書いていますが、社会保障費を負担する若年労働者が減少し、その負担割合は益々厳しくなるでしょう。

高齢者一人に対して年金や医療費を負担する勤労者はわずか二人になるといわれています。

この状況を少しでも緩和する為に健康であることは言うまでもありません。

平均寿命の大幅な伸びで定年後の生活も長くなりますが、いまが最高の時期ですと云えるような心身ともに健全な時期を過ごしたいものです。

平成十四年度
由良地区公民館役員名簿（順不同敬称略）

主事　枝川隆亮

【運営審議会委員】

由良小学校長　吉田　均
由良自治連合会長　北野誠治
脇自治会長　岡本康弘
宮本自治会長　森本貴孝
浜野路自治会長　足立　明
港自治会長　山田武治
下石浦自治会長　岸田　明
上石浦自治会長　山下正男
市議会議員　山下清一
前公民館長　酒田　治
学識経験者　四方寿朗
由良幼小学校ＰＴＡ会長　山田康夫
栗田中学校ＰＴＡ会長　有本　敬
由良婦人会長　森野千代子
由良老友会長　岸田　勇
由良子供会連絡協議会会長　舛井満夫

【公民館役員】

公民館長　飯澤登志朗
主事　枝川隆亮

【分館長】

脇分館長　小室秀雄
宮本分館長　竹田　茂
浜野路分館長　大森章弘
港分館長　上田泰司
下石浦分館長　岸田　剛
上石浦分館長　岸田秀樹

【幹事】

（文化部）部長　中西　衛
副部長　中西一雄
上良宏之・由利明弘
中西雅彦・岸田国彦
足立登記子・中西達也
市場正治・山下正貴
森野千代子・小松恵子

（体育部）部長　浜崎利雄
副部長　川崎直樹
副部長　浜野純子
津田　一・浜田宏信
竺原　栄・上羽康一
山本かおる・千坂幸雄
大森智朗・中西一就
山田直美・柴田克己
蒲原玲子・野村雄治
木村すなを・岸田弥生
山田美代子

（体育部講師）
小室文雄・森田美砂子

平成十四年度事業計画

【文化部】

盆踊り大会（地蔵盆）　八月十八日
文化祭（婦人会協賛）　十一月三日
人権学習会　十二月八日
四部対抗区民囲碁大会　二月二日
自治学級　二月九日
生涯学習会講演会（婦人会共催）　二月二十三日
公民館だより発刊　年三回
由良歴史年表編纂事業　周年
青少年体験活動（子供会連絡協議会共催）　未定

【体育部】

由良岳登山（第三十六回）　四月二十九日
第十三回宮津市地区対抗駅伝競走大会（南部コース）　六月二日
四部対抗バレーボール大会　六月九日
四部対抗球技大会（野球・ソフトボール）　八月十四日
歩こう会（小学生・保護者・一般）　十月二十日
青少年体験活動（子供会連絡協議会共催）　未定
グランドゴルフ大会（中・高年者対象）　未定

行事報告

主事　枝川隆亮

◎二月三日(日)　四部対抗囲碁大会

冬の時期、恒例になっている四部対抗囲碁大会が開催されました。個人優勝された方は脇地区の佐原さんでした。

※囲碁クラブでは只今会員を募集しております。

初心者の方には基本からお教え致します。奥の深い囲碁にトライして見ませんか。入会を希望される方の連絡をお待ちしています。

熊田良雄　☎二六－〇七二四
中西　衛　☎二六－〇七五〇

◎二月十日(日)　自治学級

今年はパネリストとして市役所より4名、自治連会長　大森秀朗氏をお招きし市町村合併について勉強をしました。

一、いまなぜ、市町村合併なのか
二、国・府・地域の取組み経過
三、合併の形態と手続き
四、合併のメリット・デメリット
五、合併の組み合わせ試案
六、合併時の国の支援措置

一～六の問題点について宮津市の担当者より説明、解釈があり、その後意見交換に入りました。

医療・福祉・観光等切実な問題があり、閉会予定の二十一時三十分を超過して白熱した意見交換がされました。

大雪等、条件は悪かったが約五十名の参加者は十分に理解を深めたものと考えています。

◎二月二十四日(日)　生涯学習講演会

本年四月より学校五日制の完全実施に関して「学校と地域」はいかに関わっていくのかという内容で、由良小学校長　水谷洋子先生に講演をしていただきました。

明治初期に学校制が始まって以来の大改革であり、家庭・地域社会では、生徒が家庭で生活する時間の増大につれ「ゆとり」のなかで「生きる力」を見出ださせる。

自らが課題を見つけ、学び、考え、主体的に判断し行動させ、より良く問題を解決する力を養う。家庭では優しさと厳しさとのバランスを考えて下さい。

以上の内容でありました。

スライドを使用し詳細な説明をしていただき、婦人会四十四名を始め六十名の出席者が聴取しました。

◎四月二十九日(月)　由良岳登山

伝統ある由良岳登山は今年も四月二十九日に実施されました。

宮本地区の桝本清さん指導の準備体操で体をほぐした後、登山開始となりました。

春霞ではありましたが、天候の特異日なのか四月二十九日は雨が降らないので感謝をしています。

昭和四十二年より続いているこの登山は三十六回を迎えており、年々多くの方々にご参加をして頂いております。

最高齢の市老人クラブ連合会長佐古田賢蔵さん八十三才、最年少嶽静花ちゃん三才（港川崎直氏のお孫さん）を始め合計二

六九名であり、用意した登山記念ハンカチが不足になり、後日郵送するという盛況ぶりでした。

観光協会の方々との登山道整備と当日、計二回登山をしましたが東峰、西峰の頂上付近の樹木等の成長がはげしく見晴らしが悪くなり来年は大規模な刈り込みが必要であると感じました。

先輩が残してくれた登山道を後輩の私達が受け継ぎ守ってゆかなければと考えております。

由良岳頂上

◎六月二日(日) 宮津市地区対抗駅伝競走大会

恒例の駅伝大会も本年は南部コースでありKTR丹後由良駅前をスタート、市民体育館をゴールとする十二区間で競われました。

昨年は準優勝、今年は四位と毎回由良地区は健闘しています。

三名の方が区間賞を獲得されました。

新宮鶴雄さん

尾崎　華さん（小学五年）

田中結人さん（小学六年）

最後の区間では岡田多恵子さんがゴール寸前で栗田地区を追い越すシーンもあり、大会を大いに盛り上げました。

五月八日より六月一日まで長期にわたり練習を積みかさねて来られました。

選手を始め、指導をしていただいたコーチ、自治連の方がたに感謝を申し上げます。

ご挨拶『地区の皆さんと共に』

自治連合会長　北野誠治

雨にぬれた緑の色が美しく、春もいつしか過ぎ初夏の日射しになって参りました。

皆様には益々ご健勝にてお励みのこととお慶び申し上げます。

この度大森秀朗氏の自治連合会長ご退任に伴い不肖私が後任として自治連合会の推薦委員会のご推薦を受け、四月一日より連合会長の大任をお受け致すことになりました。

元より私はその器ではありませんが、地区の皆様の心温かいご理解とご協力を頂き務めさせて頂きたいと存じています。

新年度が始動して二ヶ月、歴代の連合会長の方々が敷かれた堅固なレールの上をひたすら走り始めたばかりで、不安材料は山積しています。今更乍ら責務の重さを実感している次第ですが、各自治会長さんまた、公民館の役員さん並びに各種団体のご教導を賜り、地区の皆様と共に住み良い由良地区づくりに微力を注ぐ決意でありますので何卒宜しくお願い致します。

さて、近年急速に進んで参ります情報化時代の中、少子高齢化に加え過疎化が由良地区に於ても深刻に成りつつあります。

それに加えて宮津市に於ても市町村合併問題を急速に取り組まなければならない年になって参りました。

ここで合併問題に少し触れて地区の皆さんと一緒に考えて見たいと思います。

宮津市の説明によりますと平成十四年一月に宮津・与謝一市四町（岩滝、伊根、野田川、加悦）を範囲として、それぞれに

住民との論議を深めて行くことになったと市長は説明しています。

市町村合併問題は政府の取組みで合併特例法と言う法律の改正を行い、これに基づき各都道府県が地方公共団体である市町村に行政サービスなどを自らの責任で適切に選択して行くなど、自主、自律性を求め、的確に行政運営を進めて行くため、財政基盤や政策等のより一層の行財政基盤の充実を図って行く必要があるとの事由です。

そもそも市町村の変遷は明治二十年に始まり、戦後間もない昭和二十二年に地方自治法が改正され、新制中学校の設置管理や消防、社会福祉、保健衛生関係等の事務が町や村に移管されました。

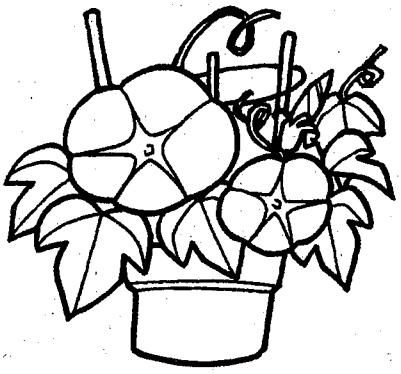
更に、昭和二十八年には町村合併促進法が施行され、とくに新制中学校を効率的に設置管理できる数、人口にして合併が進められました。

これらが、いわゆる「明治の大合併」「昭和の大合併」と言われています。市長は将来に亘る市民の幸せの為に市町村合併の選択は避けて通れないと明言されています。

市町村合併問題は国や府県、市町の問題ばかりではなく身近なわれわれ市民の深刻な問題です。

合併には必ず生ずるメリット面デメリット面等について理解を深め、豊かな将来のために地区の皆さんの積極的なご意見を頂きたいものと考えています。

ご協力の程よろしくお願いします。



地域に開かれた学校づくり

由良小学校長・幼稚園長　吉田　均

この四月より山紫水明の素晴らしい自然環境に恵まれた由良小学校・幼稚園に赴任して参りました。どうかよろしくお願い致します。

地域の皆様方には、日頃より由良小学校・幼稚園の教育に対しましてあたたかいご支援をいただき、厚くお礼申し上げます。

「公民館だより」の原稿の依頼をお受けした時は、ちょうどみかんの花が満開の時期で、甘ずっぱい香りがどこからともなく流れて来て、ずい分前に川田正子が唄った「みかんの花咲く丘」のイメージだなあと思って、ついロずさんだものです。

みかんの花が咲いている
思いでの道丘の道
はるかに見える青い海
お船が遠くかすんでる

前置きが長くなりましたが、二十一世紀も二年目を迎えています。新しい時代には新しい教育をということで、今年度から教育の内容や方法が大きく変っていますことは皆様方も報道等でよくご承知のことだと思います。しかし、なぜ変わらなければならないのか、また、実際にどう変わっているのかなどについては、なかなか見えにくいところもあるかと思います。

そこで、少し説明を加えますと、まず、平成十四年度から新しい学習指導要領に基づく教育が始まりました。「学習指導要領」というのは、日本全国どこで教育を受けても一定の水準の教育が受けられるようにするために、それぞれの学校が毎日の学習内容を組み立てる基準となるもの

です。およそ十年に一度改訂となっています。

新しい世紀を迎えて、これからの時代はこれまで以上に激しい変化に直面することになります。社会を担う子どもたちが二十一世紀を主体的に、創造的に生きていくためには、時代に応じた教育を受けることが必要となります。

「ゆとりの中で生きる力を」をキーワードにした新学習指導要領が目指す「生きる力」のある子どもとは、確かな学力を持った子どものことです。ただ、ここでいう「学力」とは、算数や国語の知識や技能だけではありません。学ぶことへの意欲や態度、自分で考え判断する力、表現する力など正に激動の二十一世紀を乗り切る総合的な力です。即ち、新学習要領では、これまでの教育の内容を厳選し、そこから生まれた時間的、精神的なゆとりの中で、基礎、基本を確実に身に付けるとともに、時代が求める力を付けることをねらいとしている訳です。

今年度から完全学校週五日制が導入され、全ての土曜日、日曜日が休みとなりました。学校週五日制は、子ども達の生活全体を見直し、ゆとりある生活の中で、子ども達が個性を生かしながら、豊かな自己実現を図ることができるようにと、平成四年九月より月一回、平成七年四月からは月二回というように、順を追って実施されてきました。

子ども達は、増えた休みを利用して社会体験や自然体験など、教室では経験できないことを通して、前述した総合的な力を身に付けていくものと期待されているところです。

こうした国の教育改革のポイントを押さえながら、由良小学校・幼稚園でも新学習指導要領に準拠し、時代に合った教育を進めています。

また、学校・園の基本的な姿勢として、「地域に開かれた学校づくり」を目指しています。保護者の方をはじめ、地域の方々に気楽に小学校・幼稚園に来ていただき、子ども達の様子を自由に見ていただけるような「オープンスクール」にしたいと思っています。授業参観日や行事のある日は、地域の内外を問わず、どなたが参観にきていただいても結構です。とにかく学校・園に足を運んでいただき、子ども達に有声無声の声援をお願い致します。

地域あっての学校・園、地域に根ざした学校・園、地域とともに進む学校・園でありたいと考えています。

いろいろな方の声を大事にしながら開かれた学校づくりをすすめて参りたいと思いますので、どうかよろしくお願い致します。

学校生活と地域

栗田中学校校長　三田剛資

日頃は、本校へのご支援・ご協力をいただき感謝しております。昨年度も、二年生徒により『こころ生き生き体験活動』で、地域の十八の事業所のご協力をいただき、多くの成果を上げることができましたことにつきまして、まずもって御礼を申し上げます。

今年度は、本校並びに栗田、由良小学校を含めた『地域ふれあい体験活動』の指定を京都府教育委員会より受け、子ども達が同様の活動を引き続き行いますのでよろしくお願いいたします。この取組は、学校・家庭・地域社会が緊密な連携を図りながら、豊かな体験活動を通して生きる力の核となる豊かな人間性を育てることを願って行われるものです。

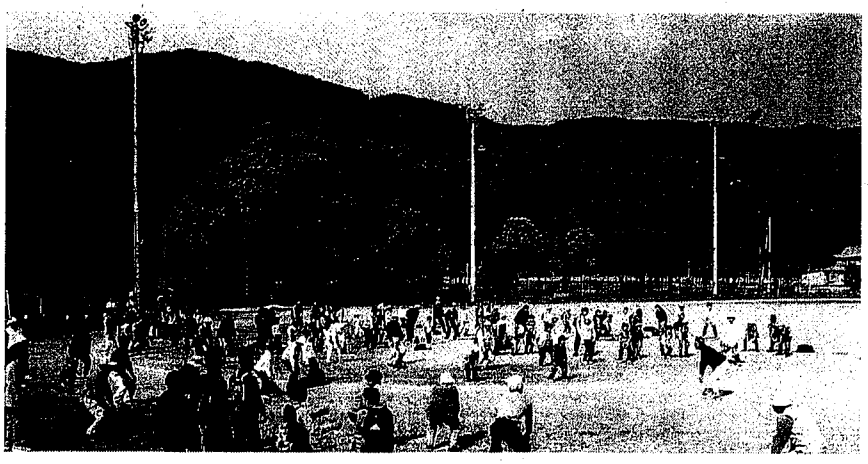
さて、今年度は四十三名の新

入生、二学級を迎え入れ、全校生徒百三十五名（由良地区生徒五十二名）で平成十四年度のスタートを切りました。今年度より学校が完全週五日制となり、地域で子ども達が過ごす日が多くなった訳ですが地域での子ども達の様子はいかがなものでしょうか。学校では、目指す生徒像として『自ら学ぶ意欲を持つ生徒』『自他を尊重し協力しあえる生徒』『心豊かで生命を大切にする生徒』『自分の言動に責任を持つ生徒』の四点をあげ、知育・徳育・体育を兼ねそなえた生徒を育てることとしています。日ごろ、学校を訪れる方々からは子ども達があいさつをよくするとの評価をいただくことが多くあります。これまで、地域・家庭でご指導をいただいた賜物であると感謝しています。

しかし、毎日の学校生活で課題がない訳ではありません。いわゆる『規範意識』の弱さなど気になることも見られ、朝礼の講話や学校での道徳の時間さらには教科指導の中で指導を行っています。学校外の遊びでも地域の方々にご迷惑をお掛けしていることがあり、連絡をいただいたときは直ぐに対応させていただいているところであります。中学生は心が揺れ動く難しい時期であるからといって社会のルールを破ったり、人に迷惑をかけることは許されるはずはありません。新しい教育課程でこれまでにない取組をしていますが、学校は生徒が学ぶところですから、規律を守ることやだれもが楽しい思いで学校生活を送れるよう全力をあげたいと考えています。学校の内外を問わず子ども達が自らを律し、自ら考え、自ら行動をしていく力が付くようにしていくことが最も求められていることであります。これらのことについては、地域や家庭の協力をいただくことが肝要であると考えています。学校外の生活での接し方について子ども達の行動にしばりや強制力がなく、難しいとの声を聞くことがよくありますが、学校でも地域での行事や子供会への参加の大切さについて指導をしていきますので保護者や地域の皆様も地域での子ども達の生活についてこれまで以上に関心を持っていただければと思っております。

ところで、学校では毎月一〇日を授業参観日として子ども達の学ぶ教育の内容や学校生活の様子を見ていただき『声』をいただけるよう保護者以外の方々の参観もいただけるようにしております。その折には、教科同様に道徳教育の参観もしていただくよう考えています。また、学校をよりよく知っていただくために、学校だよりを各自治体のご協力をいただき、月々回覧板で見ていただくようにしております。

色々な情報が入り交じり、子育ての価値観が多様化している昨今でありますが、学校と地域、保護者の皆様とこれまで以上につながりを強めていきたいと考えていますので本年度もよろしくお願い申し上げます。



由良岳登山準備体操

世紀を越えて

「二十一世紀の子供たちに期待すること」

子供会連絡協議会会長　舛井満夫

この度、役員会のご推薦を受け、子供会連絡協議会の会長になりました。

万事不行届きなところがあるかと思いますが、皆様の御指導、御支援を賜りながら取り組みたいと思っておりますので、何卒よろしくお願いいたします。

さて、恒例によって文書をかかせていただくことになったわけですが、何を書いたらいいものかと、カエルの合唱を聴きながら新緑に映える由良ケ岳を眺めて考えておりました。

もう田植えは終ったでしょうか。

今年もゴールデンウィーク明けのとある休日、子供たちをつれて通称洗濯川にメダカを捕りに行ったところ、水を張った田圃に稲がきれいに整列しているのを見ることができました。

毎年、ふるさとの田園風景を楽しめるのも、農家の並々ならぬご苦労のお陰と感謝しつつ、かつて、ある農林関係の研修会（宮津市内ではありません。）で「ノーといえる日本農業」というような内容の私が作った挨拶文を読んでいただいたことを思い出しました。

今となっては若気の至りだったと思いますが、稲作文化こそが日本人のアイデンティティーの一つであり、食料の生産だけでなく、環境保全など農業の多面的機能をもっと海外に主張すべきであるなどと新聞雑誌等を引用し、少し勇ましいことを言ってみたのですが、近頃の日本を取り巻く国際情勢を見てみると、どうもこのような日本の主張がうまく外国に伝わっていないんじゃないかと思えてきます。

その原因の一端は、これまでから、多くの出版物が指摘してきたように、他国と陸続きで国境を接していない島国として形成された日本社会と、その文化にあります。

イエス、ノーをはっきり言う、お互いの立場を尊重し議論しあうという土壌が欠けているため世界という大きな場で自分たちの意見がうまく伝えられないのだという結論になっています。

そういえば、私たちが子供の頃受けた学校教育においても、議論の仕方とかコミュニケーションスキルを向上させるための授業はなかったと記憶しております。

そんな状態でも島国日本国内にいる限りあまり支障はなかったのでしょう。

ところが、インターネットで一個人が全世界と結ばれ、経済を中心に何事も世界標準が求められる時代となり、状況は一変してしまいました。

国や社会だけでなく、いろんなものに保護されてきた個々人が、自己責任に基づき、コミュニケーションスキルを駆使して自分の意見を正確に伝え、自分とは全く異なる感情、意見、価値観を持った人たちを理解し、この狭くなった地球という国で共生していかなければならないのです。

このような時代となった今、資源のない日本の大切な資源は人材です。そしてそれを育成する開かれた学校や地域社会ではないでしょうか。

私が子供たちに求める理想は、二十一世紀を担う子供たちが、しっかりとしたコミュニケーションスキルを学び、あらゆる差別を許さない人権感覚を身につけ、それを基に、小さな地域社会から大きな国際社会まで、自分がおかれた社会の中で、人と人とが結びあうための大切な輪（和）

となってくれることです。

そのことが大いなる和の国、日本（大和）の二十一世紀の新しいアイデンティティーとなれば、日本人の果たす役割はきっと二十二世紀の歴史家に高く評価されていると思います。

二十世紀の歴史作家である司馬遼太郎はその著書「二十一世紀に生きる君たちへ」のなかで、こんなことを書いています。

自己を確立せよ、自分に厳しく、相手にはやさしく、それらを訓練せよ、と。

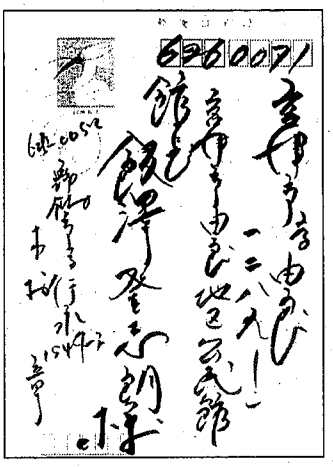
自己表現すること、相手の気持ちを考えること、そして人権感覚を身につけることも成長とともに自然に身に付くものではありません。朝起きて顔を洗うことが幼少の頃からしつけられよい習慣となるように、訓練しなければならないのです。

その訓練の場は家庭であり学校であり地域社会です。

そしてその訓練は一生続きます。

二十一世紀におとなになっていた我々にも……。

「登山参加者からお便り」



例年になく季節の移り変りが早い様です。

先日の由良ケ岳登山ではお世話になりありがとうございました。

早々に登頂記念品を頂戴いたし誠に恐縮に存じます。

先ずはお礼申し上げます。

学校週休二日制に関連して

栗田中学校ＰＴＡ会長　有本　敬

本年度より、これまでの月二回の土曜日休みに代わり、完全週休二日制が、全面的に導入され、これに伴い、授業時間も減少し、授業内容も三割減少しました。

随分、昔の話になりますが、私が中学生、高校生の時に、習った事が、小学生・中学生の教科書に載っているのを見たことがあり、今の子供達は、難しい内容を習っているのだなあと感心したり、驚いたりしたものです。

今回の改正では、その意味では、授業内容が三割方減少し、詰め込み教育に偏りがちな授業が緩和され、ゆとりある教育が可能になると思います。

その反面、学力の低下の心配が指摘されているのも、又事実です。

これを心配する私立中学・高校では完全週休二日制を導入する学校は半数程度にとどまっているようです。

また、大学側からは、大学教育に必要な基礎知識、特に自然科学分野での知識の低下に、懸念の声があがっています。

今後は、大学で補修を行っていき、一方では、大学を卒業するのを難しくする事が、検討課題になっているようです。

これまで大学は、どちらかと言うと、入学するのは難しく、卒業するのは比較的易しい、とされていました。

本来は、諸外国の様に大学はもう少し厳しくしても、止むを得ないのかもしれません。

また本年度より、耳慣れない言葉ですが「総合的な学習の時

間」が設けられることとなりました。

これは、「ゆとり」を持たせて、体験的活動を通して、主体的に行動できる様にするのが狙いだそうです。

各学校の創意工夫で授業を行い、中味は、各学校が決定していきます。

先日、テレビで、川で魚とりを行っている学校が、取り上げられたように、具体的に何をやって行くかが、今後の大きな課題であり、学校・ＰＴＡが、創意工夫を凝らしながら、より良い授業にしていく必要があると思います。

さて、週休二日制になって、子供達は一体、土曜日・日曜日に、何をして過ごすのかと言う事が問題になって来ます。

単に土曜日の休みが増えただけ、という結果にならないようにしなければならない、と思います。

栗田中学校では、ボランティア活動については、これまでより、駅舎の清掃、海岸の清掃等を行っておりますが、本年度は子供たち自らが考え、それを実践していく事としています。

学校やＰＴＡが考え、それを押しつけるのではなく、計画段階より、参画し、それを実行し、結果を、生徒自身が評価し、次に生かすことが重要と考えます。

地域行事にも、積極的に参加し、小学生の指導や又世話をする事により、中学生としての自覚も促されると思います。

いずれにしても、本年が本格実施元年であり、週休二日制がより良いものとなるように学校、地域の方々とも、力をあわせお知恵を借りながら、ＰＴＡ活動を行って行きたいと考えています。

一期一会

由良婦人会長　森野　千代子

緑豊かな由良岳、目にしみる青い海の日本海と四季折々の、美しい自然に恵まれたのどかな地、風と共に潮の香、みかんの花の香が漂ってきます。

ガーデニングがはやっている昨今、どこのお宅も玄関先には、それぞれの工夫を凝らした花々が、色とりどりに並んで心をなお一層和ませてくれています。

この度婦人会長という大役をお受けすることになりました。無知・無力な私にはこの重責に押しつぶされる毎日です。

情報化・国際化と社会の変化が急速に進む中、地域における婦人会の果たす役割は大変大きくなっています。その中で肌でひとつひとつ勉強をさせて頂いています。

総会というスタートの席で、素晴らしい感動を頂きました。

「皆さん今晩は」の御挨拶をさせてもらった後の事です。出席者の方の「今晩は」の声の響き、頼りない私に〝頑張れ〟とエールを送って下さったように聞こえ、百人力という位のパワーになりました。この一年間のエネルギーにしたいものです。

私の好きな言葉に一期一会という言葉があります。皆様方のお力をお借りして、背のびをせずに、人と人との出会い、ふれあいを大切にして頑張りたいと思います。そして私の心の庭にもいっぱいの花が咲くことを願っています。

どうか御指導の程宜しくお願い致します。

由良の豊かな自然と神々

由良神社宮司　嶋谷卓之

春には桜が咲き、秋にはみかんが実り、恵み豊かな美しい自然に囲まれた由良。

又南には霊峰とも云える由良嶽がそびえ、ここからの水流は清く美しく「はくれい酒造」の源として、又農業用水、飲料水として由良の人々の生命を守り、育んできた。

これら自然に溢れた由良の里内には古くから「むら」「里」の成り立ちとともに特色のある神々が多く祭られています。

西から奈具脇の「奈具神社」祭神は豊宇賀賣命で五穀豊穣、酒造守護の神です。近くには稲荷神社があり富貴栄達を守護し、近く山中には「荒神」庚申、又は竈(かま)神ともかき悪霊を追いはらうための道祖神でもある。

そして由良の中央には、「由良神社」(花御所八幡宮)が祭神は伊弉諾命、櫛御気命、譽田別命が祭られ、五穀豊穣、航海交通安全、家内安全、厄除災息、男女和合、夫婦円満等其の御神徳も多い。

広嶺神社の祭神は須佐男命で厄除と農業の守護神です。

下石浦には住吉神社が氏神としてあり、祭神は筒之男命で水難守護、航海安全、祈雨、止雨を祈念した護国の神々です。

上石浦には「中路神社」(日吉神社)が存し祭神は大山咋命で、山林守護の聖地として鎮座した。

他海の守護神金比羅神社が磯山に祭られ、水の除災神である水無月神社。港の照国稲荷神社、浜野路の稲荷神社、石浦にも稲荷神社が奉ぜられ由良各地に稲荷信仰が盛んであったのがよく理解できる。

他、秋葉神社、愛宕神社は火の守護神であり、旅の安全の荒神等、当時の生活(くらし)の母体である農業神やそれにかかわる水の神々。由良地域の自然神がいかに重要であったかがわかる。

他にも市杵蔦神社が熊野山に祭られたり、道真公、安寿姫を偲ぶ北野神社が港に奉られ、神霊鎮魂の想いが伝わってくる社もある。由良の歴史と深いかかわりのあるこれらの神社が存在するのも大きな特色である。これら先祖伝来、先人等が残してくれた多くの歴史文化遺産を次の世代に継承していくのが「今」を生きる私達に与えられた課題ではないでしょうか。

最近の新聞記事で神社費と自治会の関係について報じられていましたが、参考にと思い政府の見解をここに掲載致します。

総務省自治行政局の回答—自治会の神社奉賛金の取扱いについて—

神社の祭典費や氏子費を自治会・町内会が集金してゐる事例は、全国的に多く見られることであり、神社と地域社会との深いつながりを示すものだが、近年、神社と自治会・町内会の関係が問題視され、さまざまな混乱が生じてゐる。

そうした中、昨年十二月十九日、自治会の神社奉賛金の取扱いに関する総務省自治行政局の回答が出された。これは、富山市内の町内会長(東幹治氏)からの照会を受けてのものだが、この回答は、「町内会や自治会が神社の祭典費・氏子費を集金しても何ら問題がない」ことを改めて行政が確認したという点で、その意義は極めて大きい。

■回答

「自治会の神社奉賛金の取扱い」に関する件につきましては、自治会は行政機関ではございませんので、貴説のとおりと考えます。

(平成十三年十二月十九日

総務省自治行政局行政課長名)

旅は気儘に……。パート６

丹後由良ターミナルセンター

平成十四年、三、五

初めてのカニの食事にと降りた駅。昼すぎていたので、何も食べる所がなくて、昼食ぬきにはつらかった。神戸より老いて二人旅。

二〇〇二、四、七

タンゴディスカバリーの乗りかえを舞鶴でミスって、生まれてはじめてＫＴＲに乗りました。天気のいい小春日和で、のどかな町に来れて何か得した気分になれた。地元京都で毎日通勤電車に乗ってバイトに行ってます。イナカの良さを肌でかんじました。

一度降りてしまうと、次の列車への乗り換えもままならず、大変な思いをされる方や、少しのゆとりを持って下さる方など、さまざまですが、誰もが、経験ある失敗で、出来るかぎりの最善の案内をこれからも心掛けたいと思います。

今回、先輩の方が次の様な言葉を残していかれました。

変わる世に変わらぬ願い
ひとすじに　咲きて寂かに　充つる野の草

思いを知る　犬の教えし　栃の実に　掌合わされし　義母を礼せり

秋雨の浜を彷徨い疲れたる老婆震える掌で　茶をすする

どなたじゃな　逢うごと遠のく心を抱いて　老婆彷徨う　玄冬の浜

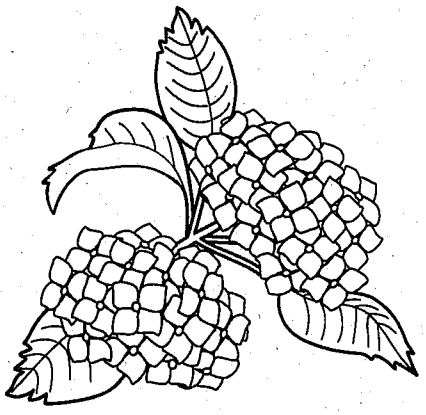
生涯のホームともならず　此度また　義父の車専送　秋雨の中

幾度か通いなれにしこの道も、今日をかぎりとおもいめぐりて

すべての最後に、辛己法光　臘月中旬三日とかかれてます。今の時期静かな駅ですが、休日になると、由良岳登山に見える団体さん、グループ、個人の方と、いつも感動しています。

町の本屋さんで、由良岳の本をみつけて来ました、などと話す京阪神の方々が多いです。五月は、近辺の子供会、歩こう会など、列車を利用する目的もあり、たくさんの方が来て下さいました。丹後由良の良さは、来て下さるお客様から教えてもらいます。そして、良さをそのまま、持って帰って下さるといいなあと、思っています。

今年は、はじめて、駅舎の高い高い天井に、はじめてツバメが巣を作りました。ツバメが巣を作るのはいい事なんだって、聞いてますので、少々汚れたりもしますが、脱落する事なく、元気に巣立ってほしいと、皆んなで祈っています。



短歌

一本の傘に寄り添う影浮かび追憶の街に春の雪降る
幽界へ逝きたる人を恋うならむ君影草の俯(うつむ)きかげん
冷房のききたる部屋に秋桜を描かむ愁思のこころ透かせて

藤本史代

下肢切断告げられし時の慟哭も今は過ぎたり生きて楽しも
歩く喜びがあると義足の我に言ふ足を病みたる友の面差し
義足を穿くその冷たさが身に沁みる紅葉かがやく晩秋の朝

坂本妙子

この道を肩をならべて歩きたし夫ははるけき黄泉のくに
釘ひとつ打てぬ我が身のもどかしさ夫よ来ませな紫雲に乗りて
タンポポの綿毛五月の風に乗りはらから別れ旅立ちゆきぬ

山口美子

馬鈴薯の花咲く畑に透りくる雲雀の声を鍬やすめ聴く
日もすがら釣糸垂るるひと二人小さき港の景に溶けゆく
水色の静かな空の広がりに窓辺へ伸びてライラック咲く

山田よしの

植込みの花房さげし藤の下つなぐ幼児(こ)の手の甘きぬくもり
塞(さい)の神ほこら小さく紫の花房かすかにゆれる安らぎ
誰も居らぬにわか作りの箱中へ料金入れてとせまる子愛(かな)し

とよ子

孫の手にとうもろこしの種をのせ二粒ずつと教えて　畑に
夕日背に孫らの回すフラフープ数よむ吾も夕陽のなかに
遠近に鶯鳴くを聞きながら明日の出荷の実山椒を捥(も)ぐ

大森萬喜子

青空の深みを渡りゆく風にひかりは無尽　なお生きよとて
高照らす日の光浴みて緑葉はきらきらと五月の風に遊ぶを
今年またせんだんの花咲きこぼれ視野うつくしく夏の来る径(みち)

中西夏江

学校五日制に思う（1）

―地域の子供は地域で育てる―「家庭・地域社会・学校の連携」

大森章弘

今年四月から、毎週土、日を休みとする完全学校週五日制が実施され、教育内容と教科課程の抜本的見直しが行われ、新学習指導要領が実施されている。

そのような状況のなか、地域の子供が育つ場として、家庭、地域社会、学校の三者が連携、協力した新たな教育の創造が必要といわれる。この教育連携の展開にあたってそれぞれが主体となって協働機能を発揮するためにはどのような事柄が必要になるのであろうか。

《家庭には》子供の充実した生活の場として、家庭の持つ意図的・無意図的な教育力そのものを高めていく保護者自身の努力が基本として必要である。とりわけ、情緒的な安定感の機能と社会への通過門としての機能の存在、自己の有用さの実感を保障する取組みである。そのような家庭自らの努力だけでなく地域社会や学校や行政の働きかけも欠かせない。その働きかけで得られた情報の主体的な選択のもとに、保護者には家庭の状況に応じた家庭教育を創出していく努力が必要であると思う。

また、保護者には、子供同士によって育つ時間・空間の意義を改めて認識することや、家庭が開かれた家庭として地域社会の中で育つ子供に目を向けることも非常に大切であると思う。

《地域社会には》前提として、保護者自身は地域社会の一員としての責任を負う存在である。その点で、大人自身が自らの生活環境である地域社会の実情の正確な把握のもとに地域社会の中に生活の拠点を確立すること、加えて、大人同士のコミュニケーションを図り、連帯して共通の社会規範を再生し、大人自身にとっても文化的で豊かな生活環境を創出していく努力が必要である。そして、地域の人びとの間に、この地域のかけがえのない子供たちとして、他人の子供に対しても温かく見守る目を共有する意識の確立が必要である。さらに、生活の拠点としての地域社会において、その日常的な教育活動に巻き込まれた地域の大人が重要な教育資源として価値ある存在としてとらえられ、しかもそれを実感できる場を創り出していくことも求められるのではないかと思う。

なお、社会教育施設や機関との連携においても、「学社融合」の理念に立った事業の展開が大切であると思う。

《学校には》「開かれた学校づくり」の推進が必要である。まず、情報発信とともに情報受信の基地としての機能を充実していく努力である。それには、学校や教師に対する保護者による積極的な働きかけを可能とする条件整備や共に子供の成長発達を考えていくパートナーであることを発信していくことが重要である。さらに、保護者や地域の人々との共通の話し合いが一方通行となっていないか等点検していくことが求められる。

さて、「地域の子供は学校を含めた地域で育てる」という意識が大切である。①広い視野で子供を見守り、鍛え、育てる場②多くの人たちとの交流により、自分と異なった様々な価値観に触れる場　③様々な体験や活動を通して、豊かな人間性や社会性を身につける場　が地域社会である。子供たちには地域の行事に参加させ、大人と子供の触れ合いを通して心の交流の場を作りたい。そして子供に地域の役割を与えて、地域に役立っている実感を与えたいと思う。

「七曲八峠」探査行

実施日　平成十四年三月十四日

自然観察指導員　中西俊夫

七曲八峠、長尾峠とも言う、旧藩時代の頃は北国街道のうち、また遍路道とも言われていた。宮津から上宮津を経て京に向かう旧街道とあわせて宮津と田辺を結ぶ主要な街道であった。

この道の踏査については二十数年前に一度試みたが途中道の崩落したところがありそこで打ち切った経緯があり、いつの日か栗田までの峠道を探査したいものと思っていたのであるが、たまたまある会合で話をしたところ案内してあげるでと日比氏に言っていただきようやく実現することができた。

探査行に同行してもらったのは、市教委東氏、自然観察指導員仲間の永久氏、由良からは四方俊一氏と日比氏の5名、由良の歴史にも関わる事なので由良の歴史を探る会の参加を呼びかけたが参加してもらえなかった。

いよいよ行動開始、行程は柴勧進の碑を横に見て直進、石畳道を経て脇山の神の祠横を通りここからはいよいよ登りの道に、山の猟師さんがたまに通るくらいで人の通ることのない山道、落ち葉と枯れ枝それに道の中にのびた木々を鉈で切りながら、またイノシシの死骸などを見ながら余り急ではない道を進む。進みながら今後の調査の目印にと黄色いテープを木に付ける、地図によるとここが一の峠とある。

峠の頂上からは木々の間から栗田の無双方面を望む、ここからは下り坂、落ち葉に見え隠れはしているが石畳や石段があったり石垣積みの所、また屋敷跡らしきところを見ながらの下り坂、この道も真中にも大きな木や倒木がありそれを跨いだりくぐったりしながらしばらく進むと小さな沢で道が途絶えた所に出る。下の川をみると取水の設備があり国道沿いの紫城舞取水場であろう。

ここから先どこにつながっているのかまったく分からない、とりあえず沢におり先の斜面を登り道の続きを探す。上の方を探す者、下を探す者などにわかれようやく続きを探し当て先に進むと先でまったく違ったところで続きの道に出会い、その道を逆に沢まで戻り確認をし、そこに目印のテープをはる。ここからはなだらかなアップダウンの道をしばらく進むとまたまた崩落箇所に出会う。あまり深い崩落ではないが道は途切れ、またまた続きを探すのが大変、ここも迷いながら続きを見付け先に進む。途中大きな木の幹に熊の爪あとなどをみながらさらに進むことしばらくで松林石材さんの採石場跡に至る、道の横には火薬庫跡とみられる石造りの小屋三棟を見る。道はここで断ち切られたかたちになっていてここから先はまったく分からない状態である。

道を探すため採石運搬用に作られた道を山裾を回るように下に進み三枚橋の所に出ていったんここで休憩。つづきを探すため地図を調べて後ここから以前温泉を掘っていたところまで反対側の山裾を登り探すがまったく分からない、ここでも探すためまた別れ別れに尾根にむかって斜面を登る。登ったところが鉄道の擁壁の上、ここからは双子岩を望むことが出来最高の眺め。これを見ながらさらに尾根筋を上に向かって登るとようやく尾根上にでる。ここには高圧線が通っておりその下が尾根筋のようである。道の真中に大きな石がデンとすわっていてここで一休みをし反対側の斜面を見

ると石柱が倒れているが見えたので調べてみると（宮津ヨリ三町三十三間）の刻まれている、石の下側も気になるが大きくて動かす事ができない。

帰り道を通るとき気づいた事であるが、昔栗田と由良の境に（是ヨリ加佐郡由良村）反面に（是ヨリ与謝郡栗田村）という石柱が建っていたが、この石柱から山の尾根に向かって線を引くと尾根上の石柱はこの線上にあるように思われる。このことから尾根上の石柱は由良と栗田の境であったのではなかろうか。

ここからはなだらかな下り坂、倒木や枯れ枝などの障害物をさけながら進むとまたまた沢で道は途切れており下の川は富田屋（双子岩）の取水施設のようである。その対岸の斜面を登ったところに一部崩落した道があってそこを進むとしばらくでしのび竹の群生地に入り、竹を分けながら進むとようやく開けた畑地に出る。この畑地の先でまた道は切れていたので沢に向かっておりると、ここにも富田屋・海苑の取水場があるその沢沿いに少し下がるとそのさきには鉄道の隧道があって、その手前から斜面を左に登る道があるのでそれを登っていくと先はゆるやかな登り坂になっていて道幅も広いが葛や枯木が多くそれらをさけながら進むと笹原に出る。ついで畑地に出てさらに進むと栗田の嶽に行く道に出会うその道を少し下がると途中から右側にすこし細い道があったので、それを下ると広い屋敷跡や野壺などのある開けた所に出る。その屋敷跡の前あたりの道は広くその道を登るように逆にたどってみると前の笹原に戻り、笹原で進めなかったところここが本道であることを確認する。さらに下がって朽ちかけた橋を渡ると法花経塔（宝暦七年九月脇邑井上〇〇建）と刻まれた石柱が建っているそこを下りようやく鉄道に出る。目上は国道の陸橋栗田側、前は脇の金比羅宮の森になっていて、そこを下って栗田の脇にはいった。

由良側柴勧進を出発してから約六時間、途中迷い迷いであったが念願の七曲八峠を踏査する事ができた、長時間の苦闘やったという思いである。

将来この道が歴史の道として整備されることを望みたい。

帰りは国道を歩いて帰る。静かな海には水鳥が沢山およいでいるのがみえ、あれはスズガモ、あれはヒドリガモ、カンムリカイツブリと永久氏に教わりながら歩く、つねには車で通り過ぎる道もこのような水鳥や景色を眺めながら歩くことで気づかなかった多くの事を学ぶことが出来たように思う。

公民館だより第一一四号
訂正とお詫び

	誤	正
P11 上から三段目	書くから一	書くから一
P12 右から11行め	書くから一	書くから一
最下段		
右から16行め	中学	中国

由良の想い出と今

大森　仁（六十二歳）

六十歳で定年退職して故郷の由良に帰ってきました。由良の想い出など記してみました。

自然がいっぱいの由良

赤トンボの想い出……私が小学生であった夏の終わりのある日、自宅の前のさつま芋畑の上を赤トンボが空一面に飛び廻っていました。それに見とれていた私は思わず手に持っていた野球のボールをトンボめがけて「えいッ」と投げてしまい、大切なボールを無くしてしまった想い出があります。あんなに多くの赤トンボを今は見ることがなくなりました。

蛭（ヒル）と鮒（フナ）とメダカの想い出……小学高学年のある日、田んぼの畝で魚採りに夢中になり、一度にたくさんのフナをすくいましたが、気が付けば両足に四・五匹のヒルがしっかりとくっついており、半泣きになりながら一匹一匹足から外したものです。最近は蛭や鮒を見かけなくなりましたが、昨年の夏、由良駅の山側でホタルが一度にたくさん飛んでおり、昔と変わらぬ「故郷」に感銘しました。

野球

昔から由良は野球が盛んで他の地区より「野球の強い村」という印象を私は持っておりました。実際に私たちに近い先輩たちが、丹後地区の中学校の大会で優勝し府下大会に出場されました。私も少年時代は毎日暗くなるまで由良の浜や学校で仲間と野球ばかりしておりました。小学生の時、一度大阪球場にプロ野球を観に連れていってもらい、自分もプロ野球の選手になりたいと思ったことがあります。それで当然のことのように中学時代は野球一筋でした。村の皆さんが野球に大きな関心をもっておられ、後輩の指導にも熱心でした。小松忠衛さんや故大森寅一さんほか多くの方々のお顔が懐かしさとともに想い出されます。お蔭で私達が中学三年の時、当時は由良川中学として丹後地方の代表となり府下大会に出場することできました。私にとっては中学時代の大きな大きな想い出となっております。

そんなことで、学校としても当時は野球以外には余り力が入らなかったのか、いきなり選手として連れて行かれた卓球大会ではダブルスのサーブのルールを知らず、恥ずかしい思いをして、勝てそうな相手に負けてしまった苦い想い出もあります。

よく遊んだお蔭で健康な体に

話は変わりますが、中学時代までに自然に恵まれた故郷で精一杯体を動かし元気な体を作ることができたお蔭で、今日まで病気知らずで、退職後の今も元気で登山やマラソンに多くの時間を割いています。

健康でいることが少子高齢時代の我々の努めと考え、六・七年前から登山とマラソンに挑戦しております。深田久弥著『日本百名山』にある山の半分を今までに登りました。あせらずに残り半分を登るつもりです。マラソンの主な記録は別表のとおりです。年に一度の海外マラソンも楽しみの一つです。今のところ記録が年々良くなっておりますが、タイムにとらわれず無理をせず永く続けていきたいと考えております。

マラソンの練習では由良から和江神社往復（十キロ）や大川神社往復（二十キロ）を走っております。時々八雲小学校の児童たちに出会いますが、みんな「こんにちは」とか「ただ今」、「頑張って下さい！」と挨拶や

応援をしてくれます。「挨拶ができる子はすばらしい！」と思い、走っていてもその子たちから元気をもらいます。

大川神社といえば、子供のころ年に一度のお祭りの日、由良から船やトラックの荷台に乗せてもらってお参りしたことを思い出します。当時は随分遠くに感じたものです。

素晴らしい故郷・由良

走ること・歩くこと・体を動かすことが健康には大切です。幸いにも故郷・由良には綺麗な山（由良嶽）あり、海（ビーチ）あり、川（もみじ公園など）あり、そのうえ歴史と史跡があります。健康で文化的な生活をエンジョイするのにもってこいの素晴らしい環境で大切にしたいと多くの知人・友人に自慢している今日この頃です。

2001年11月
ニューヨークマラソンにて
ここでは私も外国人！

フルマラソン（42.195km）

1999年12月	ハワイホノルルマラソン	5時間08分30秒
2000年10月	中国北京国際マラソン	4時間10分34秒
2001年11月	ニューヨークマラソン	4時間08分27秒
2001年12月	甲子園西宮国際マラソン	3時間51分49秒
2002年02月	泉州国際マラソン	3時間40分01秒

ハーフマラソン（21.0975km）（本年分）

2002年１月	高槻シティマラソン	1時間44分02秒
2002年３月	兵庫山東ロードレース	1時間45分03秒
2002年４月	芦屋国際ファンラン	1時間43分03秒

由良の地名 ―その四―

小谷一郎

由良に関連があるのかどうか、まだはっきりした裏付けをした史料はありませんが、多分、古い時代、由良に関係があったと思われる地名として、こんな地名があったことを知っておられますか。それは、「凡海（おふしあま）」という地名です。

今から千年前、承平年間（九三一～八）に作られた「倭名類聚抄」という分類体辞書の、国や郡のことを誌した部に誌されています。

「丹後国」（現、熊野・竹野・中・與謝の四郡と宮津・舞鶴の二市を加えた地域）加佐郡に「凡海郷」とあるのがそれです。それは郷名だけで、郷域について何も書かれていませんから、加佐郡（現、舞鶴市と宮津市字由良を加えた地域）のどの地域に当るかははっきりしていません。

しかし、丹後国には上代から、海上交通や漁撈に従事した海人（あま）の族が分布していました。それを率いていたのが、丹後の海部（あまべの）直（あたい）でした。この海部直というのは、現在の宮津市府中の籠神社宮司家の先祖である海部氏であり、そこに伝承された国宝「籠名神社祝部氏（マヽ）係図」（宮津市史、史料編第一巻五二頁）によれば、海部直が五代、海部直が祝（はふり）として養老元年から籠神社の奉斎してきたことがわかります。これは、律令制度による地方行政組織が確立し、それまで地方を支配して来た国造（クニノミヤツコ）が、地方神の祭主である祝（ハフリ）に専任されたということで、それまでの祭政一致の政事（まつりごと）が改められたということです。

大和政権にあって、地方の海

部を統轄していたのが安曇(あづみ)氏であり、安曇氏から地方に派遣されていたのが凡海(おふしあま)部です。この凡海部が地方で支配していたのが凡海郷の地であったのだと思います。そして、その地を根拠としてその任務を果していた凡海部の仕事についての記録を見たことはありませんので、それを説明できないのが今の状態です。これからもっと研究しなければとは考えています。

時代は下って、永享三年（一四三一）の「御前落居記録」の史料に「丹後国凡海部郷」の記載を見ることができました。（前掲同書三五三頁）この史料と、室町時代の丹後における国衙領、荘園等の耕地面積・知行者を記録した「丹後国惣田数帳」と照合すると、「田数帳」で郷名を欠いている部分が、落居記録の内容にある「凡海郷」であることがはっきりします。すると凡海郷の郷域内に和江村が含まれていたことが分かります。凡海という郷名を考えてみると、同じ由良川の左岸で上流に位置する和江が凡海郷に属するとして、それより海に近く、海に沿っている由良村が凡海郷に属するのは当然であろうということになると思います。これにはそう考えることができるということで、はっきりとした裏付けということにはなりませんが、今の処、これ位の史料による解釈しか私達にはできないのです。

由良には、前に考えてきた通り、海部や凡海部に関係するような地名は全くないのでしょうか。少しばかりこじつけになるかも分かりませんが、湊（みなと）などは或いは海人族と関係が深い地名ではないかと考えることはどうかと思ってみています。久美浜の海部の近くにも湊宮という地名を見ることができますので、そのように考えてみてよいのではないかということです。また「泊」（とまり）などでもそういう意味で考えてみてもよい地名ではないかと思っています。丹後にはもっと海人族と関係の深い地名がもっとあってもよいのではないか。そうすれば、もっと海部の仕組みや働きについて、はっきり知ることができるのではないかということです。

由良でなく、隣りの栗田の地に、それに似つかわしい地名があります。それは、栗田の住吉神社の所在する地は小字蟹ヶ杜(カニモリ)とあるのは「蜑(アマ)ヶ杜」の誤り伝えられたのでないかと教えて下さった中嶋利雄先生の説かれたのがそれでした。蜑は舟を家とし会場を住処として活動する海人族そのものですし、杜は「神社のある地の木立」を意味すると解されていますが（岩波版「広辞苑」参照）、これは鎮守の森を意識した解釈であり、神の依代である木立を主に考えすぎでないかと思います。私は人の居るべきところを中心に見ていくべきだと思うのです。人が集まった所に神が祀られたし、其処に依代の木立が作られていくというのが本来の姿であり、「杜」は木立でなく、人の住んでいた処であったと思いたいのです。例えて言えば「杜(もり)」は守衛する処であり、守衛すべき処であり、それは侵すものに対しては塞ぐべき処であるということです。「杜」はまさに人の衛るべき処であり、そのために、人の屯している処であります。「あまがもり」は、海人族が屯していた処であったと解したいのです。大修館書店版「大漢辞辞典」を調べてみますと、「杜」は「とぢる、ふさぐ」とありました。こういう意味があり、私の解釈もそう的外れのものでなかったのだと思っています。

このように考えてきますと、丹後の海部、凡海郷、蜑ヶ杜という海部にかかわりのある民族と地名をつなぐ歴史が新しい興味を引くことに今更のように反省させるのを感じさせるのです。

（平成一四・六・五）

そろばん指導の任務を受け

タイ国の田舎に一年間暮らして（一）

シニア海外ボランティア　西野啓子

貴方の技術をタイ東北部（タイでも、最も貧しい地域）の子供の為に生かしてみませんか。

集中力を養い、学力向上を目的としてのそろばん学習を、タイ全土の学校の授業に取り入れる計画が打ち出され、学校の先生にそろばんを教える為の指導者を、タイの教育省が求めている事を知ったのは、平成十二年十一月でした。国際協力事業団、略して通称ＪＩＣＡ（ジャイカ）と呼ばれている、青年海外協力隊のシニア版です。

家の嫁としての勤めも一応手を離れ、末の息子も社会人と成り、長女の子も無事一歳を迎え何もかもが、ホッと一息のそんな時に飛び込んだ、ビッグニュースでした、駄目で元々、応募しないで放って置く手はないと、よくぞあの時用紙を取り寄せたものと、この一年間の充実した時間を振り返り、自分の大胆さに拍手です。三回の試験の後、合格通知を受け取る迄の、時間の長かった事が思い出されます。タイ国がどちら向きなのかも知らなかった私が、俄かタイ通に成る為の、日常生活心得の研修、そして、タイ語の研修等、東京のウィークリーマンションに主人と二人で住み、毎朝通勤ラッシュも体験しての勉強が始まりました。人生五十五年間の中で、あんなに一生懸命勉強をしたのは、あの時が最初で最後でしょう。その割には年のせいで、記憶力が低下していたのか、それとも、元々覚えが悪かったのかもどかしい限りの三週間でした。

タイの生活の様子は、研修で教えてはもらっていても、なんせ生まれて初めての海外です、出発間近になると不安が募ります、戦後の日本の生活に戻ってもらいます。買った水以外は決して飲まない様に、トイレに紙は有りません。等々、持って行く品物選びは本当に悩みました。味噌も醤油も無いとのことです。食べ物の悩みは最大です。今思えば、あちらの人は皆生活して居るのだから、同じ暮らしをすれば何の心配も無いと言う事を、出発の時には考える事の出来ない私でした。同時に私には密かに計画している事が有りました。その準備の為の荷物が大きな比重を占めました。任務とは別に、現地の子供に直接そろばんを教えて、その学習の成果が学業に、どれ程の効果として表われるものか見てみたいと考えて居ました。一年間しか許されない時間の中で、どこまでやれるか不安も有りましたがまだ誰もやった事の無いこの取り組みに、ワナワナしての出発でした。四月八日自宅出発、九日は調印式、日本の顔で有る事を認識して業務に就く様に、との言葉を添えて公用パスポートを受け取り、十日タイ、バンコクに着きました。

暑いです！今頃が最も暑い季節、四十度はとっくに越えています。三月末から五月中旬まで長期休校、夏休みは納得です。

一歩外へ出るとまるでサウナ風呂の熱気です。汗が吹き出します。化粧なんて肌にくっついては居ません。額の汗に押し流されて、顎の所に溜まった化粧は顎と首とをかぶれさせてしまいました。でも不思議！タイの女性は平然と美しく化粧した顔で街を歩いています。しかも、厚手の布で身体にピチピチに仕立てた服はなんと、長袖です。汗を拭いている人は見当りません、汗をかかないのでしょうか、一年間この事は謎のままでした。タイは水かけ祭りの真最中です。

竹久夢二の挿絵の記憶

濱野路　大森　孝

(一)

……花のお江戸じゃ夢二と言われ、〝故郷へ帰ればへのへの茂次郎―〟後年自嘲さえもした夢二が子供の頃にいつも渡ったとされる、小川にかかる茂次郎橋を古橋を二つも超えて、岡山県は色久郡の夢二の生家をやっとたづねあてた。二〇〇一年秋は十月十日の牛窓町への旅の途中であった。実はブルーラインを牛窓の朝鮮通信史ゆかりの寺への旅行は既に丹海バスで九四年初夏に行っていたものの、その旅行では大方の願いを断って、この生家へは寄ってくれなかった。

わくわくする思いで、ああこれでブルーラインの旅は満点だと夢二の生家を訪れた。茂次郎橋を渡って、山へと続く斜面の道を暫く進むと、山裾が前を遮って、長屋のような建物が藪や山の木々をおおいかくし、前は庭がひろがっていた。構えは寧ろ素朴な感じで、ぶどうの木が一本生えていた。近所隣りの新しく建てられた住居が取りまく中で、打ち棄てられた廃屋の匂いが漂う一角となっていた。門の右手の長屋は物置と化し、背後にせり出す竹藪を懸命に押し止めようとしているかのようであった。

これが嘗ての造酒家か？訝しむ程の凋落した生活の場でさえあった。この住居の前に立つと、初めての出会いの喜びや期待に高鳴る胸の鼓動が、少々萎みかけてくる。そのかみは栄えていたろうになア。何故か夢二のためにやり切れない気持ちになった。

時間に迫られているので、玄関へ入って土間のつき当りは、改造されたような板の間は土産物などを販売しているし、すぐ左手の畳の間（客間？）へ上って、八畳位のその部屋を通りぬけないと、夢二の勉強部屋へは上がれない。その部屋へ行くには、二階へ上がる階段があった。してみると、彼はつねに、客間を通りぬけて、自分の部屋へ行ったり来たりしていたわけである。

部屋には明かりとりとも言える文机の前の窓があって、昔の出窓で、ガラス戸の役目をする格子状の木が汲みあわさって、落下を防いでいる。この窓は畳の位置に近くしつらえているのでまるで茶室のにじり口の構えであった。そんな、にじり口の障子の下の敷居にくっつけて、彼の愛用した文机が、刻まれた傷あとを残しておいてあった。一つポツンと、実に簡素である。

ただそこからの眺めは優れていた。茶室のにじり口に更には、め込まれた二本の桟や、縦の柵が邪魔をして、外ののびやかな田野がすっきり一望できないもどかしさはあった。ここにも夢二が想像力を働かせて、ものを見るようになった秘密がかくされていたのか。格子状の邪魔物があった、かような潜戸に似た窓が、ものを見たり考えたりする際の屈折したり、思索したりする幅を醸成して行ったものか。それらは判らないが、いずれにしろ、気になる昔作りの設備の窓、そのいらざる柵である。

住居が高台にあるので、彼は日々移り変わる自然や人々の生活の営みの姿を、この机越しに窓越しに見つめたであろう。又、多感な資質は、窓の外の潤いのある風物からとりこんで行った、いろんな糧があったと思われる。

今、失礼を赦して頂いて、あえて由良の地域で、夢二の生家の立地と相似した住居を挙げるとすれば、例えば、一つは宮本二七三一の森本貴孝氏宅や、二

つは下石浦公民館あたりでもあるし、又は上石浦三九九の山下憲弥氏宅ででもあろうか。見下ろしてさらに先へ遠く田野が広がっていた。

このあと、私は或挿絵の一齣に予期せぬ出会いをする。それは私にとって実に六十余年ぶりの、はからずもの出会いであって、いわば脳内に眠っていた或細胞が叩きおこされたような、まさに電撃的なものであった。

時間にせかされるように、次の間に階段を降りた。細長い、この部屋（昔の酒造作業場？）には、挿絵の数々や壁には生涯の年代記なども掲示されていた。陳列棚の作品を一つ一つ見廻っている時、私は思わず、わが目を見張った。確かにこの絵だ。見覚えがある。『これなんだ。この「絵」を子供の頃、確か友人、足立達夫君から借りた、古い雑誌の中で見たんだ』その一枚の前で釘づけになって、先へ進めない。妻も他の観光仲間も、私の感動をよそに、すいすいと次へ移動して行く。けれども私はこの『外套を着た、俯き加減に佇む一人の男』この奇妙な、一種不思議な風態の〝烏天狗〟を初めて見たのは、確か日中戦争に入っていたかな？私が小学校高学年か中学一年か、そして読んだ雑誌は昭和十年前後に発行された少女倶楽部か、又は令女界？そして読んだ浜野路八〇八の足立君の家には女性といえば母がいるのみで、思えば不思議づくめである。往時茫々。殘された記憶の端々を断片的に辿りながら、『生家』の見学はそこで止まってしまった。

一枚の謎？の挿絵は、私の脳に激震をはしらせ、少年の頃、みた夢を、再び蘇らせてしまった。

竹久夢二は私の五才の時他界。（私はその四十年後輩）彼とは作品・挿絵を介してしか出逢えないのだが、何故か凋落を託って描いたと推測される『外套を着た男』にこだわるのであった。

（二）

ここに至って、その昔、日中戦争下の、加佐郡由良村の文学熱というか、より高い文化を志向する、住民の方々の営みは決して半端ではなかった。即ち、明治三十年代末から大正のはじめにかけて、石浦や濱野路（上良とよんだ）にあって、定期的に少女雑誌などが買い求められて読まれていた証左は先に述べたことからもわかる。又証言も多い。由良は一見物静かな田舎みたいであるが、文化、文学への土壌は密やかではあっても、脈々と今日に引き継がれていると、自負している。私もこうした土壌の上に生活できたことを幸せに思っている。

戦争中にして、なお旺盛な知識欲をもって読書していた人々がいたことに誇りと自信をもって、これからも真実を求め、連綿と文化を織りなして行きたい。

（了）

俳句

森田　喜代次

たんぽぽがどこから来たのか一つ咲く

紫陽花を手まりに込める妻の芸

作者は由良出身、東京在住。
森田精二氏の叔父さんで九十二才。

由良に住んで四十年

思い出すままに（九）

由良簡易水道　四方寿朗

由良岳に降った雨や雪は、豊富な地下水となって蓄えられ、一年中絶えることがない。現在は清潔で安全で美味しい水が、由良のように何時でも得られる所は、世界では勿論、日本でも珍しくなった。

太古の昔、由良に住居を構えた最初の地は、恐らくきれいな飲料水の得られる上石浦、下石浦と脇の川の側だったと思う。人口が増えて、新しく建つ家が、川から次第に遠くなった時、人間は井戸を掘ることを考えたのだろう。文献によると、古墳時代の遺跡から、丸太をくりぬいた井戸側が発見されている。

私は昭和三十三年頃、宮本の山口源一さんが由良で井戸を掘っておられるのを見た記憶がある。砂地にコンクリート製の丸い井戸側を置き、内の砂を掘り出して、側を地中に沈め、次々と上へ側を積み足して行く。上の重しには、大きな板の上に乗せた砂を使う。五メートルも掘り下れば、水の層に達する。

井戸水を汲み上げるのに、昔は綱をつけた釣瓶を利用していた。技術が進歩して、井戸を掘る代わりに地中に鉄のパイプを打ち込み、釣瓶の代わりには、手動のポンプで簡単に水を汲み上げることが出来るようになった。

私が由良へ来た当時、電動のホームポンプを井戸に取り付けて、家庭内に配管する家が多くなり、主婦がバケツで水を運ぶ重労働から次第に解放されていった。

蜷川知事の肝いりで昭和四十三年から始まった「ろばた懇談会」で由良の上下水道問題が話題にのぼっていた。昭和四十四年、保健所の検査で、由良の民宿八十軒の内、六十数件の井戸水から大腸菌が検出された。カルキを井戸に投入することで、やっと保健所の許可を得ている現状が報告された。大腸菌は人間の腸内にも常在して、それ程問題にはならないが、これは何処かの便槽と井戸がつながっている証拠で、若し赤痢患者が発生すれば、このままでは井戸水を通して集団感染の恐れがある。早速翌四十五年四月、由良地区簡易水道設置促進委員会が結成され、二年後の完成を目指して活動を開始した。

まず水道原水を何処から取るか。種々調査の結果、地下水と決まった。由良神社から東側は海水混入の恐れがあるので除外された。一番心配されたのは、水道のための大量汲み上げで、一般家庭の井戸水が枯れないかだ。しかしこれは杞憂だった。由良の地下の砂の間には、時々の洪水の際堆積した泥の層が存在して、水道の原水は、一般よりずっと深い砂の層から汲み上げるのだからである。

又、脇の鉄道線路の山側に浄水場を造る工事で、地下に矢板を打ち込んだ。すると、此処から海へ向かって一直線に並んだ家々の井戸の水位だけが一斉に下がった。地下水は由良岳から海まで、幾筋もの川となって流れているのだ。海岸線と平行な流れはない。

それから忘れてならないのは、水の濾過滅菌の主役は微生物だと言う事である。砂で濾過して何故極めて小さい細菌が除去できるのか？それは砂の表層に水中の微生物（細菌）が膜を作り、これが細菌の通過を阻止するのである。話は変わるが、下水の浄化槽で汚い屎尿を窒素やアンモニアなどに分解してくれるのも、また微生物なのだ。このよ

うに微生物は我々人間の大恩人である。むやみに殺虫剤や除草剤で人間以外の生物を皆殺しにしようとするのはよくない。地球上の生物はみんな我々人間の大切な仲間なのである。かくして昭和四十七年九月、由良簡易水道は完成した。

尚これら水道工事の経過は、昭和四十六年三月発行の「公民館だより」に中西孫兵衛氏が詳しく書いておられる。

また、由良でひとり上石浦地区だけは、大正十三年から独自の水道施設を造り、今日まで立派に運営管理しておられる事を付記する。

今振り返ると、この当時は水道の他、海岸浸食問題、小学校改築など、由良にとっての重要案件が山積していた。そしてこれらが常に「ろばた懇談会」に取り上げられて、我々住民の意見が多く反映されていたように思う。現在も由良川治水や市町村合併など問題は多くある。

編集後記

今回は学校週五日制に関する投稿がたくさんありました。学校教育の大きな変革であり子ども達だけでなく大人も乗り遅れそうです。

去る日、峰山町教育委員会がＫＴＲを利用して由良岳登山の参加者を募集する記事が新聞の片すみに載っていました。

早速、由良地区の登山の取組み等資料を送付したところ、好天と参加者に恵まれ無事終了した旨の感謝の便りが届きました。

地域を越えたふれあいの輪が拡がったとうれしくなります。

この「公民館だより」をご家庭にお届けする頃は海水浴場もにぎわいをみせているでしょう。

ふれあいの輪を益々拡げ、地域の活性化に少しでも役立つことを願っています。

（飯澤）

R100　古紙配合率100%再生紙を使用しています。